

きょうだい構成と親の介護

竹内 麻貴

(山形大学人文社会科学部)

【要旨】

本稿では、きょうだい構成が親に対する介護の担いやすさに与える影響を分析し、きょうだい構成の違いによって介護負担に差が生じるのかを検討した。分析の結果、第一に、一人っ子はきょうだいがいる人に比べて親の介護者になりやすいこと、第二に、親の介護者へのなりやすさに、きょうだい順位による違いはほぼないことが示された。また、親の介護における親-娘関係に着目した分析から、第三に、女性のなかでは、一人っ子もしくは男きょうだいしかいない女性が親の介護を担いやすいこと、第四に、一人っ子または男きょうだいがいる長女は、きょうだいがいる長男よりも親の介護を担いやすいことが明らかになった。これらの知見は、きょうだいの有無によって介護負担の差が大きいこと、きょうだい内では親-娘関係を重視した介護役割の配分が行われていることを示している。

キーワード：きょうだい構成、介護、親-娘関係、性別分業

1. 研究の目的

少子化の進行にともないきょうだい数は減少してきた。「世帯動態調査」によると、2004年時点で生存しているきょうだい数（自分を含む）の平均値は、1935～39年出生コーホートの4.09人をピークに後続世代では減少していき、1960年代～1980年代前半出生コーホートでは2.4人程度まで低下している（国立社会保障・人口問題研究所 2007）¹。こうしたきょうだい数の減少は、高齢となった親を介護する際に利用できる資源が、若い世代を中心に減少していることを意味する。すなわち今後の日本社会では、きょうだいの有無や構成によって、介護負担に大きな差異が生じることが予測される。本稿は、きょうだい構成が親の介護を担うことに与える影響を分析し、きょうだいの有無やきょうだい内での地位によって介護負担に差が生じるのかを検討する。

2. 先行研究

子による親への世話的援助や介護を扱った先行研究は、親-娘関係が重視されていること

¹ 平均生存きょうだい数は、1994年時点の1935～39年出生コーホートでは4.59人である（厚生労働省人口問題研究所 1996）。また、2014年時点でみると、1980年代後半～1990年代前半出生コーホートでも平均生存きょうだい数は2.4人程度となっている（国立社会保障・人口問題研究所 2016）。

を指摘している（大和 2010；田中 2013a；西岡・山内 2018）。大和礼子（2010）は、文献レビューを通じて現代日本における高齢者-成人子の相互支援関係を検討した。そして、日本では日常的援助において性別分業にもとづく双系化が進んでいると結論づけている。性別分業にもとづく双系化とは、親の介護役割は、長男またはその嫁よりも娘が担うことが期待され、経済的支援は息子が担うことが期待されるということである。

また田中慶子（2013a）は、インターネット調査データを分析し、きょうだい構成による実の親に対する介護の関わり方の差異を分析している。介護の関わり方は、介護時間、サービスの利用、費用負担、主観的な評価など多面的な指標によってとらえられている。きょうだい構造は、きょうだい人数、男きょうだいの有無、本人が長子か否かの組み合わせによって5つに分類されている。田中（2013a）は分析のなかで、週当たりの本人介護時間は、長男では短く、一人っ子または男きょうだいのいる長女で長いことを明らかにした。くわえて、介護へのコミットメントは次男以降の男性でも高いことから、きょうだいの出生順序よりも、親子双方が実の娘による介護を志向するという情緒的要因や、経済力や時間的余裕といった子ども側の実情が基準となって、親と途中同居し介護するに至るというプロセスの可能性を指摘している。さらに、長男に代わりその嫁が介護の中心的な担い手である様相が垣間みえたことから、依然として家規範的な意識のもと、性別分業的な介護が行われていることも明らかにした。パネルデータを分析した他の研究も、子から親への世話的援助（買い物、料理、洗濯、病気時の世話）に対しては、長男を中心としたイエ的伝統的家族規範よりも、親-娘であることが影響していることを示唆する結果を得ている（西岡・山内 2018）。

これらの先行研究より、現代の日本では、子から親への世話的援助・介護は、性別分業規範や親子双方が娘による介護を志向するという情緒的要因を背景に、親-娘関係が中心となっているといえる。ただし、きょうだい構成と介護役割の関係を直接分析した田中（2013a）には、調査対象に起因する2つの限界がある。データの元となった調査は、介護が必要な親・義親のうち、いずれか1名以上と2011年の調査時点で同居して在宅介護をしており、要介護者の介護費用や家計について捕捉していると回答した者に対象を限定している（田中 2013b）。そのため、1) 別居で介護を中心的に担っている人は分析に含まれていない。また、介護を担っている人の中できょうだい構成による介護の関わり方の違いをみているため、2) きょうだい構成が親の介護者へのなりやすさに影響するのかを検証できていない。本稿はこれら2点を考慮し、無作為抽出で収集された全国規模の社会調査データでも先行研究と整合的な結果が得られるのかを確認する。

3. 分析方法

3.1 仮説と分析枠組み

先行研究の知見にもとづき、以下の仮説1を設定した。

仮説 1 「親の介護者へのなりやすさにきょうだいの有無は影響するが、きょうだい順位は影響しない」

また、親の介護においては親-娘関係が重視されていることから、2つの仮説を設定した。

仮説 2-1 「男きょうだいしかもたない女性は親の介護を担いやすい」

仮説 2-2 「一人っ子または男きょうだいがいる長女は、きょうだいがいる長男よりも親の介護を担いやすい」

仮説 2-2 では、田中（2013）と同様の結果が、同居していない主な介護者が分析に含まれた場合も確認できるかを検証する。

以上の仮説を検証するための分析枠組みを図 1 に示した。本稿では、きょうだい構成の割当はランダムに決まると仮定したうえで、きょうだい構成（T）の総合効果を捉えることを目的とする。そのため、きょうだい構成の影響を受け、かつ介護をしているかどうか（Y）に影響を与えると考えられる媒介変数（たとえば同居の有無）は投入しない（Pearl 2009; Morgan and Winship 2015）。

図中の変数 C1～C3 は調整変数である。きょうだい構成がランダムに決まるという仮定を満たすためには、特定のきょうだい順位や性別構成へのなりやすさを調整する必要がある。ここでは、きょうだい構成に影響すると考えられる、子どもの性別や人数に関する親の選好の影響を C1～C3 によって調整している。たとえば本人の性別（C1）は、親が子の性別に関して回答者の性別と逆の選好をもつとき、異性のきょうだいをもつ確率を高めると予想される。またきょうだい数（C2）には、子どもの性別に関する親の選好が反映されると考えられる。たとえば、女性で第一子の回答者の親が強い男児選好をもつならば、親は男が生まれるまで出産を続け、その結果回答者はきょうだい数が多くなり、長女になりやすくなるだろう。同時に、きょうだい数が多ければ、異性のきょうだいをもちやすくなることが予想される。さらにきょうだい数には、子どもを多く持ちたいというような人数に関する親の選好も反映されると考えられる。そして、子どもに関する親の選好は、親が上の世代（本人の年齢（C3）が高い）ほど、男児選好や多子選好が強いことが想定できる²。

なお、調整変数 C1～C3 は、きょうだい構成だけでなく親の介護にも影響を与えると考えられる。すなわち、女性、きょうだい数が少ない、年齢が高いといった属性であれば、より介護を担いやすくなるだろう。なお、図 1 の枠組みが成り立つ場合、C3 の影響（矢印 a と b）については、C2 を投入することでブロックすることができる（Pearl 2009）。そのため、実際の分析では調整変数として C1 と C2 のみ用いた。

² 親の選好以外にも、出産当時の家庭の経済状況や中国の「一人っ子政策」のような国の政策などの要因もきょうだい数およびきょうだい構成に影響すると考えられる。本稿ではデータの限界により、これらの影響は考慮できない。

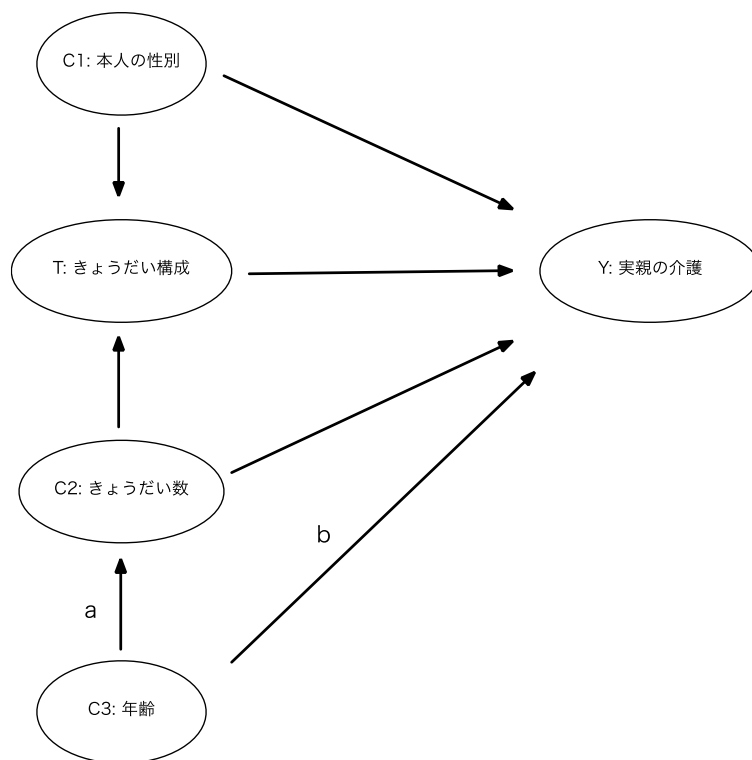


図1 分析枠組み

3.2 データと変数

分析にはNFRJ18 データ (ver. 2.0) を用いた。分析対象は、実の父母いずれかが存命している 28～73 歳の男女 2,057 ケース (欠損のあるケースは除く) である。アウトカムは「親介護ダミー (している=1)」、説明変数は「きょうだい構成」である。親介護ダミーは、現在、回答者本人が中心となって自分の親を介護しているかを示す(問 39-1)。きょうだい構成は、各仮説の検証に対応させ以下のように使い分けた。仮説 1 の分析では、「きょうだいダミー (あり=1)」または「きょうだい順位 (「一人っ子」、「きょうだいあり長子 (図表中は「長子」)」、「次子以降)」を、仮説 2-1 の分析では、「きょうだい性別構成 (「一人っ子」、「同性きょうだいのみ (図表中は「同性のみ」)」、「異性きょうだいのみ (図表中は「異性のみ」)」、「両性きょうだいあり (図表中は「両性あり」)」を用いた。また仮説 2-2 の分析では、田中 (2013) のカテゴリにあわせ、きょうだい順位と性別構成を考慮した「きょうだい順位・性別 (「一人っ子」、「(きょうだいがいる) 長男」、「男きょうだいあり長女 (図表中は「男あり長女」)」、「男きょうだいなし長女 (図表中は「男なし長女」)」、「次男・次女以降 (図表中は「次子以降)」を用いた。その他の調整変数として「女性ダミー (女性=1)」(仮説 1 の検証時のみ使用) と「きょうだい数 (一人っ子は 0)」を用いる。なお、仮説 2-2 の検証においては男女別に分析している。分析はロジスティック回帰で行った。

表 1 は基本統計量である。親の介護をしているのは約 6% (126 人) と少ない。また、き

ようだいがいない一人っ子は約 7% (154 人)、平均きょうだい数をみると約 1.5 人となっている。分析対象の平均きょうだい数は、回答者本人を含んでいない。よって、出生コーホート別にみていないため単純に比較できないが、分析対象の平均きょうだい数は、「世帯動態調査」における若い世代の平均きょうだい数 2.4 人（自分を含む）とほぼ一致している。また、男性よりも女性の方が「異性のみ」と「両性あり」の割合が若干多くなっており、女性の方が異性のきょうだいを含む傾向にある。この背景には、親の男児選好が要因ひとつとして考えられる。

表 1 基本統計量

		N=2,057	
		平均値／%	標準偏差／度数
親介護ダミー		0.06	0.24
きょうだいダミー		0.93	0.26
きょうだい順位	一人っ子	7.49	154
	長子	40.40	831
	次子以降	52.11	1,072
きょうだい性別構成	男性		
	一人っ子	7.91	77
	同性のみ	37.82	368
	異性のみ	32.68	318
	両性あり	21.58	210
	女性		
	一人っ子	7.10	77
	同性のみ	32.01	347
	異性のみ	37.36	405
	両性あり	23.52	255
きょうだい順位・性別	一人っ子	7.49	154
	長男	30.09	619
	男あり長女	25.47	524
	男なし長女	8.26	170
	次子以降	28.68	590
きょうだい数		1.47	0.87
女性ダミー		0.53	0.50

4. 分析結果

仮説の検証に入る前に、きょうだい数を親の選好の影響を調整する変数として用いる妥当性を検討する。ここでは、きょうだい数が多ければ異性のきょうだいをもちやすいのかを確認しておく。表 2 は、カテゴリ化したきょうだい数と性別構成のクロス表である。これを

みると、回答者を含め2人きょうだいであれば回答者とは異なる性別のきょうだいを、3人以上のきょうだいであれば異性と同性両方のきょうだいをもつ性別構成になりやすいことがわかる。この結果は、子どもの性別に関する親の選好がきょうだい数に反映されていることを示唆している。すなわち、きょうだい数を用いることで、子どもの性別に関する親の選好の影響を、(一部)調整することができると考えられる。

表2 きょうだい数と性別構成

N=2,057 (上段: %, 下段: 度数)

	一人っ子	同性のみ	異性のみ	両性あり	計
一人っ子	100	0.00	0.00	0.00	100
	154	0	0	0	154
2人きょうだい	0.00	48.14	51.86	0.00	100
	0	505	544	0	1,049
3人きょうだい	0.00	26.96	24.00	49.04	100
	0	182	162	331	675
4人以上きょうだい	0.00	15.64	9.50	74.86	100
	0	28	17	134	179

4.1 きょうだいの有無およびきょうだい順位の影響

図2と図3は、説明変数にきょうだいダミーまたはきょうだい順位を用いた分析の結果である。きょうだい構成の違いが親の介護をしている確率に与える影響をプロットしている。図中の丸は各変数の点推定値を表しており、横線で示された0のラインよりもプラスであれば親の介護をしている、マイナスであれば親の介護をしていない確率が高まることを意味する。丸から両方向に伸びているエラーバーは95%信頼区間の幅を示している。この棒が0のラインと重なっていないとき、その変数がアウトカムに対して統計的に有意な影響を与えていることを意味する。

まず図2をみると、きょうだいがいる人はいない人(一人っ子)にくらべて親の介護をしている確率が低いことがわかる。そしてきょうだい順位を考慮した場合、一人っ子と比べたときの親の介護確率に、長子と次子以降の間ではほぼ違いはない(図3)。以上の結果、仮説1は支持され、きょうだい順位よりもきょうだいの有無が親の介護の主な要因であることがわかった。また調整変数を見ると、女性ダミーが有意であることから、女性のほうが親の介護を担いやすいことがわかる。

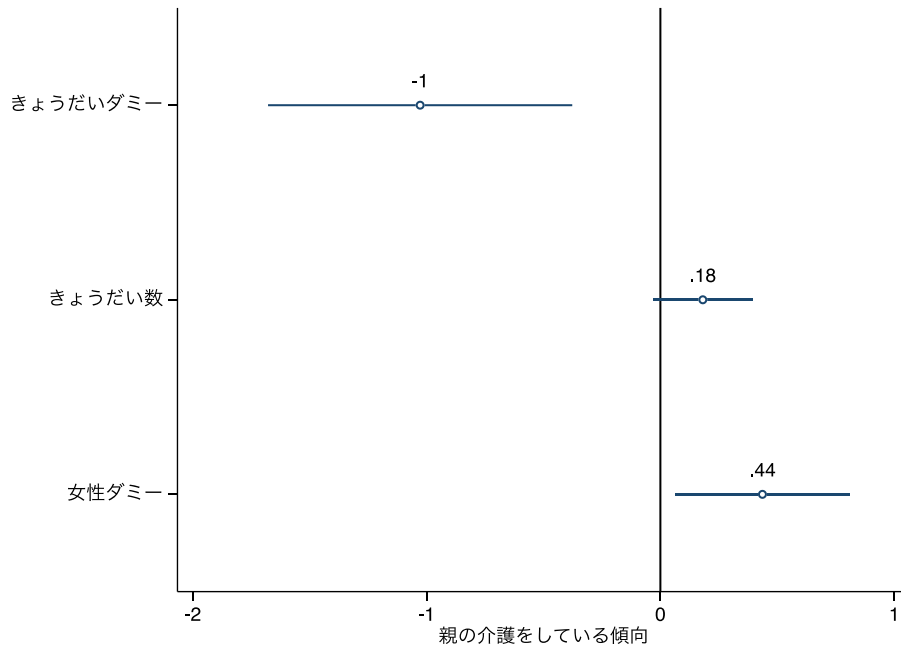


図2 きょうだいの有無が親の介護のしやすさに与える影響

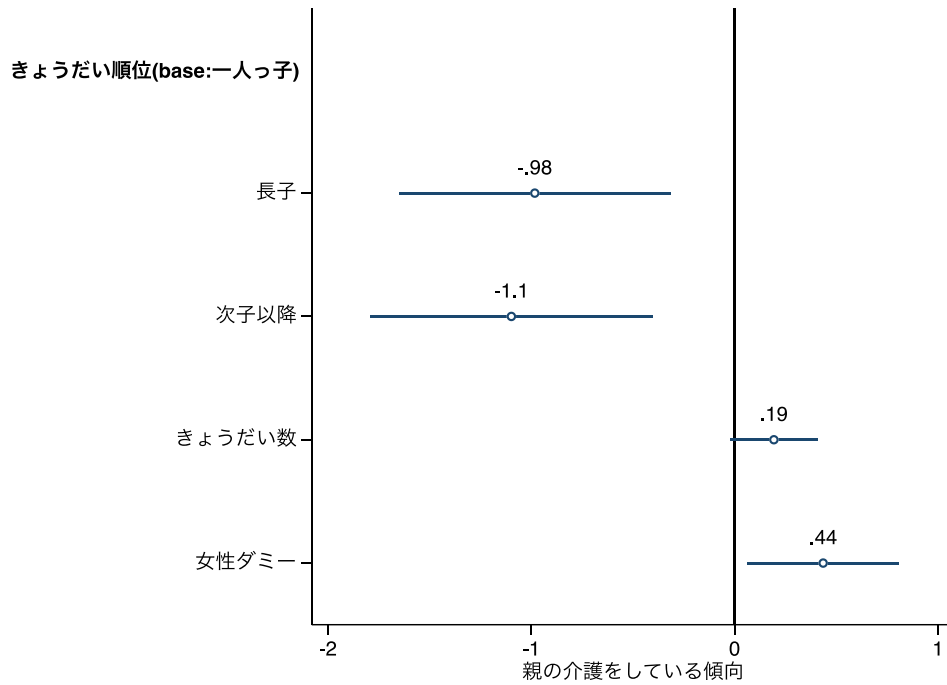


図3 きょうだい順位が親の介護のしやすさに与える影響

4.2 親-娘関係重視の影響

次に、親の介護において親-娘関係が重視されている（仮説 2-1、仮説 2-2）のかを検証するため、きょうだいの性別構成に着目した分析を行う。図 4 に、きょうだい構成が親の介護をしている確率に与える影響を男女別に示した。まず男性についてみてみると、自分以外は女性のきょうだい構成である男性（男性・異性のみ）と、他の性別構成のきょうだいをもつ男性との間には親の介護確率に有為な差がない。仮説 1 の分析では、きょうだいの有無は親介護のしやすさに影響していた。だが男性内で比較した場合、きょうだいの性別構成を考慮すると、一人っ子との間の有意差も消えている。ただし、係数の方向をみると一人っ子はプラスになっており、影響の方向は仮説 1 の分析結果と整合的である。つづけて、女性の分析結果を確認する。女性では、自分以外は男性のきょうだいのみをもつ女性（女性・異性のみ）と、他の性別構成のきょうだいをもつ女性との間には親の介護確率に有為な差がみられる。異性きょうだいのみをもつ女性よりも、一人っ子の女性の方が親の介護を行っており、これは仮説 1 の分析結果と整合的である。しかし、異性きょうだいのみをもつ女性は、女きょうだいを含むきょうだい構成の女性（同性のみと両性あり）よりも親の介護を担いやすくなっている。以上より、仮説 2-1「男きょうだいしかもたない女性は親の介護を担いやすい」は支持されたといえる。

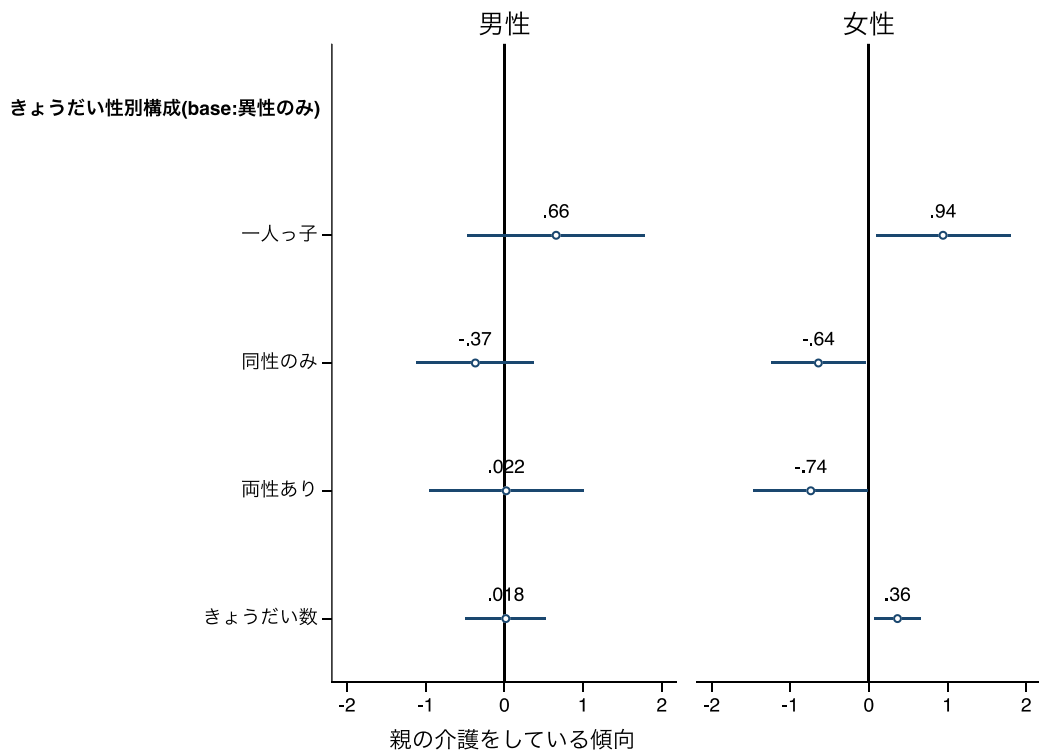


図 4 きょうだいの性別構成が親の介護のしやすさに与える影響

最後に、一人っ子または男きょうだいがいる長女は、きょうだいがいる長男よりも親の介護を担いやすい（仮説 2-2）のかを確認する。図 5 をみると、長男と親の介護を担いやすさに有為な差があるのは一人っ子であり、一人っ子であると長男にくらべて親の介護を担いやすい。ただし、男あり長女もサンプルサイズが大きくなれば有意になる可能性が高く、長男にくらべて親の介護を担いやすくなっている。この結果は仮説 2-2 を支持しており、田中（2013a）の知見とも整合的である。以上のように、仮説 2-1 と仮説 2-2 が支持されたことは、親の介護においては親-娘関係が重視されていることの証左となっている。

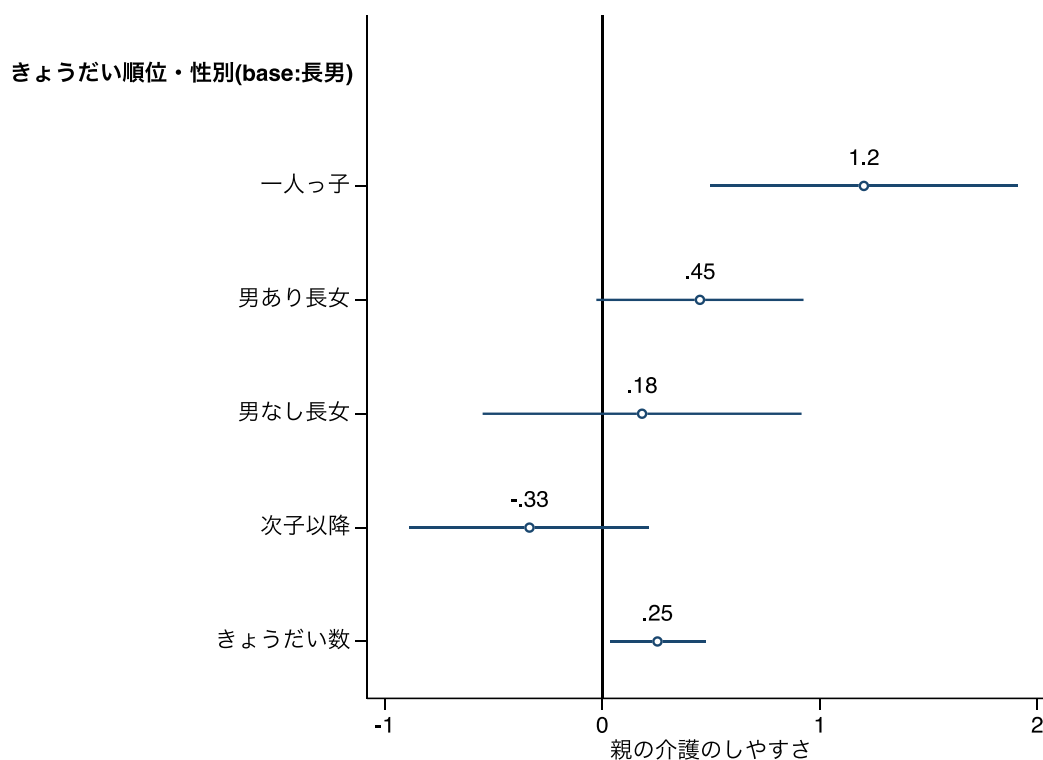


図 5 きょうだい順位・性別構成が親の介護のしやすさに与える影響

5. まとめ

本稿は、きょうだい構成が親の主たる介護者へのなりやすさに与える影響を分析した。主な知見は 4 点ある。第一に、一人っ子はきょうだいがいる人にくらべて親の介護者になりやすい。第二に、親の介護者へのなりやすさに、きょうだい順位による違いはほぼない。第三に、女性のなかでは、一人っ子もしくは男きょうだいしかいない女性が親の介護者になりやすい。第四に、一人っ子または男きょうだいがいる長女は、きょうだいがいる長男よりも親の介護者になりやすい。また以上の結果より、すべての仮説が支持された。

分析全体を通じ、きょうだいをもたない一人っ子が最も親の介護者になりやすかった。このことは、きょうだいの有無によって介護負担の差が大きいことを示している。また、きよ

うだい内では親-娘関係を重視した介護役割の配分が行われている様相もみられた。親-娘関係を重視した介護役割の配分は、親子双方の実際の娘志向や性別分業規範にもとづいていると考えられる。その他の要因の可能性も含め、親-娘関係の重視をもたらす要因が何であるかは他のデータによって明らかにする必要がある。

親-娘関係を重視した介護役割の配分は、きょうだい内においても女性に介護負担が集中していることを示している。これは見方を変えれば、親-娘関係が存在しない、男性一人っ子や男のみのきょうだい構成の場合はスムーズな介護役割の配分が行いにくいとも解釈できる。娘がいない場合、嫁(息子の妻)に介護役割を担ってもらうことが考えられる。だが、嫁も自分の親の介護を担っている場合や、現在若年層で進行している未婚化は、嫁による介護戦略をとることを困難にするだろう。介護における家族の負担はゼロにすることはできない。しかしながら、親-娘関係重視の介護で生じる弊害をカバーする社会的な仕組みと、親-娘関係を重視する人々の意識を変えていくことが必要である。

[付記]

本研究は JSPS 科研費 17H01006 (基盤研究 A「大規模継続家族調査による家族形成期の困難に関する実証的解明」、20H05804 (学術変革領域研究(A)「生涯学の創出：超高齢社会における発達・加齢観の刷新」) および 18K12918 (若手研究「政府統計とサーベイ実験を用いたケアパネルティの検証」) の助成を受けています。

[備考]

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

- 厚生省人口問題研究所, 1996, 「第 3 回世帯動態調査 (1994 年人口問題基本調査) 現代日本の世帯変動」『調査研究報告資料第 10 号』.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2007, 「第 5 回世帯動態調査 (2004 年社会保障・人口問題基本調査) 現代日本の世帯変動」『調査研究報告資料第 21 号』.
- , 2016, 「第 7 回世帯動態調査 (2014 年社会保障・人口問題基本調査) 現代日本の世帯変動」『調査研究報告資料第 34 号』.
- Morgan, S. and C. Winship, 2015, *Counterfactuals and Causal Inference: Methods and Principles for Social Research*, 2nd ed., Cambridge: Cambridge University Press.
- 西岡八郎・山内昌和, 2018, 「中高年者の高齢期の親に対する支援・援助の規定要因」津谷典子・阿藤誠・西岡八郎・福田亘孝編『少子高齢時代の女性と家族——パネルデータから分かる日本のジェンダーと親子関係の変容』慶應義塾大学出版株式会社.
- Pearl, J., 2009, *Causality*, Cambridge: Cambridge University Press.

- 田中慶子, 2013a, 「きょうだい地位と実親の介護」『季刊家計経済研究』 98: 25-34.
- , 2013b, 「在宅介護のお金とくらしについての調査」の概要『季刊家計経済研究』 98: 2-11.
- 大和礼子, 2010, 「“日常的援助における性別分業にもとづく双系”と“系譜における父系”の並存——現代日本における高齢者-成人子関係についての文献レビューから」『関西大学社会学部紀要』 42(1): 35-76.

Sibling Composition and Family Care

Maki Takeuchi
(Yamagata University)

Abstracts

We analyzed the effect of sibling composition on the probability of being a caregiver for a parent, and examined whether differences in sibling composition result in differences in the burden of caregiving. The results show that who do not have siblings are more tend to being a caregiver for a parent. In addition, the women who do not have siblings or have only male siblings are more likely to be a caregiver among women. Our findings suggest that there is a large difference in the burden of caregiving depending on the presence or absence of siblings, and that the allocation of caregiving roles within siblings emphasizes the parent-daughter line.

Key words: sibling composition, elderly care, parent-daughter line, gender division of labor